

円朝の引札(『円朝全集』未収録資料)

菊池眞一

『円朝全集』別巻二（岩波書店。平成二十八年）の「雑纂」に、「引札」として、

上野空也堂引札
浅草氷月庵引札
浅草ひしや引札
三遊屋引札
新富町塩瀬引札
柳光亭引札
日本橋布袋屋引札

の七種の引札が紹介されている。

ここに挙げられていない円朝の引札を見かけたので、紹介しておく。

田村栄太郎「明治商業資料図解」(『日本の風俗』第二巻第一号。昭和十四年一月)は、「(E) 開業披露文と商店歌」で、円朝の引札を紹介している。前置きに、

上図は植木屋の開業のチラシ文を三遊亭円朝が書いたもの、但し代作であらうが、円朝の人気を示すものである。円朝の没したのは明治三十三年八月だか

ら、それよりは余程前の広告だらうが、五月とばかりあつて年号がない。あいにく上の方が切取られてあつてわからないと思ふが、判断すると次の通りで、落語家らしいものである。

とあり、続いて引札を翻刻しているが、誤字があるうえ、振り仮名を全部省略しているので、ここに改めて紹介しておく。ただし、上端の切れている部分のルビは推定である。

開業御披露

しやう せふ おも ちが ぼん さい ごん さい あやま この ころ
笙と妾とを思ひ違ひ。盆栽と権妻と誤りしとは。比日
ひとつの談柄ながら。其扱どころなしとせず。笙の音
は能鬼神をも感ぜしめ、妾の音も又無量の感触なき
にあらず。盆栽の権妻に似たるは。這度開業做せる
まんじゆうろう ていちうせま ちり お
万樹楼なりけり。庭中狭からざれとも塵を置かず。
ていれ けはい とも やなぎ みどりくろかみ ほうふつ
手入は化粧と俱にとゞき。柳の翠黒髪に髻髻として。
りやうふう たて しやくやくすわ ぼたん かうすみ ぼら
涼風にけづり。立ば芍薬居れば牡丹。香水となる薔薇
の花。盛り争ふ好時節。御散歩旁々尊来ありて。
いはうふくいく べつびん ていけ はな おもとめ やう ちよつと
異芳馥郁たる別品を。手活の花に御求ある様。鳥渡
いっぶくいっせん せんちや いろ やまぶき みいり しげ
一腹一泉の。煎茶の色山の吹ならで。実入も茂き御
あいこ やへ ひとへ こひねが ことば はな つや
愛顧を。八重に一重に冀ふと。詞の花の艶もなく
あるじ かは のぶ
主人に代り述るになん

三遊亭円朝

五月三日四日両日開設

盆栽瓶花

浜町二丁目十一番地

盛物各種

万樹楼

現物が確認できず、写真版だけのものは全集に収録しない、という方針であれば、この資料は収録できない。

なお、田村栄太郎発行雑誌『日本の風俗』は、第三卷第四号まで、国会図書館デジタルコレクションで見ることができるし、柏書房から複製本も出ている。円朝の（万樹楼）「開業御披露」の影印はこれを御覧いただきたい。

2019年4月11日公開

菊池眞一